

編者はしがき

「人間」を根本的に革命するために書かれたのが本書である。それは「物質人間」から「霊的人間」への革命である」

本書「はしがき」の冒頭の谷口雅春先生の言葉である。さらにも次のようにも述べておられる。

「『人間』を単に物質的『肉体』として把握する場合には、肉体の疾患は、物質的方法のみに頼って癒さなければならぬのであるけれども、人間を『霊』として把握する場合、『肉体』は霊の表現体であるから、霊的自覚の深まるにしたがつて、物質的方法を

用いずして、肉体的疾患の癒ゆる实例を生ずるのである。本書の後半に収めたる、真実体験篇はその実証である。物質的医療ではおおむね不治とみとめられている近眼および色盲が、単にみずから『生命の真相』を読み、あるいは生命の真相の講話を聴くことにより、実相哲学による霊的自覚の進行とともに、不思議に治った多くの体験は体験者みずからが語るものであるから興味深きものである」

これは本篇だけにとどまらず、本全集『生命の真相』全篇に渡って当て嵌まる言葉であるが、人間は肉体がすべてであり、この世界は物質のみによって出来上がっていると素朴な唯物論、さらに、人間とは「心と肉体」の両面によって成り立っており、心の外側に物質的環境があるとすると二元論、この二つの考え方に多くの人は立っている。

しかし、人間を物質的存在であると考え、物質によって外部世界が出来上がっていると考える限り、我々は自分の肉体の変化に一喜一憂し、外部の物質的世界と「自分の心」との葛藤に縛られ、身動きがとれなくなる。心と物質との戦いは、肉体に現れ

ては病氣との戦いとなり、外に現れた環境との戦いとなり、運命との戦いともなり、その他あらゆる人生上に生起する問題との戦いとなって、我々は自分自身の心と自分の周りの環境との壮絶な戦いに終始せねばならなくなるだろう。

しかし、谷口雅春先生は、この超過酷な難問を軽々と乗り越え、一気に「常楽の世界」へと導かれる。この我々の現実世界は物質によって造られ物質に支配されている世界ではなく、また心と物質とが戦っている二元的世界でもなく、完全に物質を心の支配下に置く一元の世界を提示された。その結果、この教えに触れた数多くの人々が、病気を癒やし、境遇を改善し、家庭が調和し、人間のこの地上での生活が光明化されていったのである。

前巻に続き本書に収録されている「第八章 吾等の祈願及び修養」は、生活と人生を光明化させるための具体的方法が事細かく、詳細に述べられている。そして、それに引き続いて、その実践篇とも言うべき「真理体験篇」が収録されている。

本全集「生命の真相」には各巻に治病、教育、繁栄等の様々な治療体験が縦横無尽に紹介されているが、この「真理体験篇」は、近視・遠視・乱視だけに絞られており、極めて特異な篇となっている。

近視・遠視・乱視は、特に病氣とも認められず、めがねを掛ければ事が済むと簡単に考えられ勝ちであるが、やはり「人間本来の姿」ではない。特に、青少年や高齢者に多い近視・遠視もその人の「心の現れ」であることを谷口雅春先生は次のように述べておられる。

「私は眼の治った人であり、また治した人であるわけではありません。この、五官に於ける障害——目が見えないとか、耳が聞えないとか、鼻が嗅げないとか、或いは皮膚の感覚の麻痺、食物の味覚の麻痺とかいう、すべての感覚器官の障害は、要するに自分に与えられたる恵みを有難く受取らない人が、肉体に投じ出した姿であるのでありますから、先ず有難く受取る気持が起りさえすれば、そうした障害は自然と消え去ってしまうのであります。この目というものは、すべての美しいものを見る器官であります。美しいというのは何か、といいますと、そこに生命が顕われている事でありま

す。生命が顕われているというのは神の光、神の恵み、神の愛が顕われているということであります。その神の光、神の恵み、神の愛を有難く受取らないで、半分位受取って、不平ばかりいつているような心を持つていると、それが目に現われれば目が見えなくなったり、色盲になったりするのであります。また目の先の現象だけを見て、現象の奥底を流れる神の愛、神の恵みが分らないと、その人は近視眼になるという具合になるわけなので、こういう私も以前には近視眼であつたのであります」(六〇、六一頁)

「老人の遠視というのは、日暮れて道遠しという感じで、先のを先のを先のをと焦る心の現れであります。年を取ると、老後のことばかりを考えて、取越苦労をして『今』を完全に生き切らないことが多いのであります。『今』を完全に把握して生きる事が出来たら、それはすぐに治つてしまふのであります」(一一七頁)

「斜視、乱視というのがあります。これはものを見るのにまともに正しく見ないで、斜めの方からひねくれて見る心の現われであり、乱視もやはりまん丸いものを丸く見ないで楕円形だえいけいに見るといふような心の現われたのでありますから、よく人を見て、その点を指摘して差さ上げて、まるいものは円まいと、正しく、真正面から見得る心に調節して行かれれば、すぐに治つてしまふのであります」(一一八、一一九頁)

眼もやはり「心の現れ」であり、現在の眼の状態は心の反映であることが述べられている。青少年の近視、老人の遠視、その他乱視や色盲など眼に関する諸症状も必ず治るのである。是非本書を読まれることを強くお勧めする次第である。

令和二年十一月吉日

谷口雅春著作編纂委員会